

●エッセイ ハギオさんの髪の毛の南北問題

さそうあきら

まんが家はまんがを読むのが遅いに決まっています。

キャラクターの描き方はどうだろうか。このエピソードはストーリーの中でどういう意味を持つのだろうか。どうしてここにスクリーントーンをつかわずにカケアミをつかっているのだろうか。どういうふうにペンを動かせばこういう表情が描けるのだろうか……。

こんなことばかり考えながら読んでいます。

萩尾さんの作品を読むときには、当たり前前のまんが上の約束事にも重要な意味が含まれているのでさらなる注意が必要です。

たとえば、伝統的にまんがにおいては、わかりやすく人物を描きわけするために髪の毛の色をかえるということがおこなわれてきましたが、萩尾作品では、ことはそう簡単ではありません。

『トーマの心臓』の主人公ユーリは、その一糸乱れぬ黒々とした髪によって際だ^{きわ}った印象を与えるのですが、ストーリーが進むにつれて、彼がギリシャ系の血筋であることがわかってきます。

——「ぼくはかならず成功するつもりだから／この北国での南国に対するどんな偏見の目にもただ時を待ってればいいのさ」

ユーリのセリフのあとにはこういう注釈がついています。

——「南国」——まばゆい花と夏／朽ちた臭気とぬるい水／怠惰／あこがれと侮蔑：

『訪問者』では妻を殺したグスタフは息子のオスカーを連れて凍った海を見に行きます。

ここに出てくる北海の情景は夢に出てきそうなくらい、暗く、寂しい。

ここでふたりはそろって感冒にかかり、犬のシュミットを伝染病で失ってしまうのです。秋尾さんがヨーロッパを描くときに見せるこうした方角に対する感受性が物語にリアリティを与えていることは間違いありません。

『ローマへの道』では「北国」パリに住む主人公マリオにとって「南国」ローマは父親を殺した母がいる呪われた土地です。しかし恋人になったラエラはローマ生まれで豊かな黒髪をもちイタリア語をしゃべる女——いわばローマをのぞむ窓のような存在だったのです。そこには熱帯が生まれます。

作品の中からこうした言葉を拾ってみましょう。

——パリとローマがなにが違うって／ローマの空は……青いのよ

——雨も冷たくはない／暖かいの……

雨は作品中のパリの冷たさを表現する重要なモチーフになっています。どの場面で雨が

かわれているかお確かめください。

豊かなものと貧しいもの。暖かさと冷たさ。明るい光と暗い影。

理性的なものと粗野なもの。差別するものとされるもの……。

このようにヨーロッパを舞台にした萩尾作品では髪の毛を塗り分けるといっただけの表現で様々な南北問題を表現しているのです。

この作品の中でも母アンナ・ジェセロは金色の遺髪によって象徴的に語られています。読者は「アンナは老人ホームにいる」という萩尾さんの言葉にだまされて、病弱な老婆をイメージしていたのではないでしょうか。

登場した瞬間、その男性的なキャラクターがわかるアンナの造形の見事さはどうでしょう。

萩尾さんが常に性の問題を親子の関係や未分化な性など、色々な角度から重層的に表現されていることは今さういうまでもないのですが、この作品の中では、僕はこのアンナの造形に萩尾さんの性に対する感受性が一番露わになっていると思いました。

アンナは確かに愛する息子を守った強い母親でしたが、彼女を男性的に変貌させたのはやはりローマの大らかな空気だったのでないでしょうか。

パリに帰ってきたマリオを迎えるラエラはわざわざこう問いかけるのです。

「お母さんに会えた？／金髪だった？」
この瞬間、読者の中にわだかまっていた南北問題ははじめて解決したことが確認される
のです。

さすうあきら

一九六一年、兵庫県生まれ。まんが家。早大卒。一九八四年「シロイシロイナツヤネン」でデビュー。九九年「神童」で第三回手塚治虫文化賞優秀賞を受賞。そのほか「タマキトヨビコ君殺人事件」「黒のおねいさん」「イーサーは？」「俺たちに明日はないッス」「トトの世襲」「犬犬犬（ドッグ・ドッグ・ドッグ）」（原作・花村萬月）などの作品がある。



ローマへの道

2000年9月10日初版第1刷発行（検印廃止）

著 者 ————— 萩尾望都
©Moto Hagio 2000

発行者 ————— 辻本吉昭

印刷所 ————— 凸版印刷株式会社

発行所 ————— 株式会社 小学館

101-8001 東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

振替 (00180-1-200)

TEL 販売 03-3230-5749

編集 03-3230-5456

●造本には十分注意しておりますが、落丁・乱丁（本のページの抜け落ちや順序の間違い）の場合はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にて、お取り替えいたします。

制作部 TEL 0120-336-082

●本書の全部または一部を無断で複製、転載、上演、放送などを行うことは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

【R】日本複写権センター委託出版物 本書の全部または一部を無断で複製（コピー）することは著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（TEL 03-3401-2382）にご連絡ください。

ISBN 4-09-191259-1